

宮城県を訪問して思ったこと

東北大震災が起きた年、私は立命館に在学中でした。京都の自室で感じた揺れとニュースや新聞で震災の話を見たときの衝撃は今でも覚えています。ニュースで東北の現状を知った後、現地に行って出来ることがしたいと思いましたが、結局行けませんでした。そのため、私は今回の東北応援ツアーではその当時の自分の気持ちを思い出し、正しく震災を学び、自分の出来ることを知ろうと思いました。

東北応援ツアーで私が訪れたのは宮城県でした。ツアーではまず石巻市の石巻水産を訪れました。石巻水産では社長の弟さんが震災当時の話をしてくださいました。津波で会社が被害を受け、会社を畳もうと思ったという話を聞きました。名取市の笹かまぼこの会社さき圭の社長夫婦のお二人も津波で重量鉄骨の社宅が倒され会社が大きな被害をうけ、社員の賃金を出すのにも苦労されたとのことでした。この二つの話を聞いて、私が大学時代アルバイト先で、農業関係会社の方が震災の被害で事業が行きとどかなくなり倒産したという話を聞いたことを思い出しました。そのため、震災当時の現地の方の「これからどうしたらいいのだ」という辛い気持ちが非常に強く伝わってきました。その後全国の人に助けられ、国の補助金も受けることが出来て、現在も会社を存続されているという話を聞き、震災の残した影響に今も立ち向かう現地の方の姿と応援する全国の方の姿をハッキリと感じ取ることが出来ました。

次に向かったのは女川町でした。女川町では道に横倒しの建物が残っており、当時の津波の痕跡を今も目の当たりにできます。石巻市内でもみた津波の高さの表示板や津波の力で歪んだ建物と加えて、大自然の力強さと恐ろしさを確認しました。女川町では被害にあった方が震災は起きるものという考えや正しい避難方法をお話くださいました。正しい避難とは必ず一人で避難し、一旦避難したらしばらく戻らないということです。女川町では家族を助けに戻ったり、一度避難はしたものの家のシャッターを下ろすために家に帰ったりして津波に流されてしまった方もいたのだそうです。他にも女川町では津波で逃げる一つの目安にするために、石碑をたて、その石碑よりも高いところへ避難するように教育しているという話も伺いました。その石碑のひとつには「夢だけは 壊せなかった 大震災」といった俳句を残し、復興していこうと一丸になって頑張っている姿を感じました。

今回のツアーで私は宮城県を訪れ、自分の出来ることが何かを学びました。ひとつは、この震災を正しく学ぶことです。震災を正しく学ぶことで、震災は起こるものでありどう減災するかを考え、一人でも犠牲者が出ないように普段から避難場所や避難方法を進んで学ぶことができます。「この震災を活かし、これから震災が起きても誰一人犠牲者が出ないほしい」と女川町の方が仰っていました。震災が起きて一人も犠牲者を出さないために私達はこの震災から勉強すべきだと私は思います。他に出来ることとして、実際に被災地に足を運ぶことが挙げられます。これは被災地の現状を知ることと、被災地でお金を使って経済を良くすることが同時に行えます。この二つが私の考える自分の出来ることです。